

質疑

濱田…先ほど実践報告をしてくださった皆さん、どうもありがとうございます。

宮嶋さん、熊原さんは事務局の方になるべく早くスライドを送ってもらい、相応な勢いでかいつまんでお話をされました。市川さん、横山さんからは、土佐弁交じりで何か一気に親しみがわくお話をしていただきました。

ここでシンポジウム的なというよりも、もう少し深掘した方がいいのではないかなと思いますので、私の方から皆さんに少しずつ質問をして、深めていきたいと思います。



濱田健司氏

所有するか、借りた農地で農業をする「事業所型」と、作業を農家さんが福祉の事業所に委託するなどの「作業受委託型」があります。

この特徴は、1人の障害者の方を農家さんが雇用する。JAが中核になって色々な地域の機関をまとめて仲介する機能を持ち、横山さんが支援する職員（通称：サポーター）としていらっしゃる事です。

しかし地域で色々な障害を持っている方だけでなく、例えばひきこもりや元受刑者といった方たちも広く受け入れているのです。何か補足

1. JA高知県安芸地区

— 農業就労サポーター制度の背景 —

濱田…まず最後に登壇された市川さん、横山さんから。JA高知県安芸地区は、地域の様々な機関が連携して、一人を支える取組みです。

普通に考えると、行政は行政、JAはJA、社協は社協で分かれてしまっていますが、ここは皆さんが一つの場が集まって取り組んでいます。

高木さんから「こうち絆ファーム」の話がありました。お二人がお話されたのは、障害を持つ方が、農家さんに雇用されるタイプです。

通常の農福連携でいうと、障害者の事業所が

的にご説明いただければと思います。お願いします。

横山…私はひきこもりの方、生活困窮者、触法障害者の方も担当したことがあります。

もっと言ってしまうと、「あの人は実は、こうこうやったんや。」という情報を後からもらうこともあるのですが、実際には区別していません。つまり今現在、この方は悪いことをして逃げているわけではない。必ず法の下で社会に返すべきだと判断された方ということであれば、普通に働くことに関しては何の問題もない、というのが安芸の考え方だと思っています。

先ほども「こうち絆ファーム」のお話がありました。ここもまさしく、実際に触法障害者の方が出所してそのまま体験に来られたり、もしくは社会奉仕の一環として、ナスを詰める作業をしたりしています。

だからといって、誰かが誰かを色眼鏡で見る



横山木実子氏

ことはありえないと思います。それを地域全部で支えていくのが、まさしく安芸のやり方です。例えば出所すると住居が要りますよね。そういう方が来た時、「保証金もいらんよ。保証人もいらんよ。敷金礼金もいらんよ。」と言って部屋を貸してくれる方がいて、はじめて受け入れてできていくという図式が、安芸のなかでできていることが大きな特色かなと思います。濱田・安芸市農福連携研究会には、就労支援専門部会があります。はじめに、この方は障害者の事業所に行った方がいんじゃないか？と判

それから前課長が農業就労サポーター制度をつくったとのことですが、その思いはどんなところにあるのでしょうか？

市川…令和6年1月11日現在、安芸地区管内でJAの無料職業紹介所を通していない例も含めて合計しますと、直接雇用は安芸市22箇所と他町村7箇所、106名が働いています。あとはB型作業所「こうち絆ファーム」の受け入れが54名と、ちよつと多くなっています。

このB型作業所ですが、元々農家さんだった方が立ち上げに関わっていますので、働く方た



市川和加氏

断された時は、「こうち絆ファーム」の就労継続支援B型事業に行くことが多いです。「こうち絆ファーム」は福祉的な就労の場として受け入れるのが、一つ核としてあります。

あるいは、すぐにでも働ける状況であれば、農家さんに直接紹介することもあります。

その先に、サポーターの横山さん、JA高知県安芸地区につなげて、さらに就職や直接雇用につながるパターンもあると思います。この方はどういう特性で、何が必要なのか？あるいはその人を受け入れるために何が必要なのか？例えば就労訓練だけではなく、生活の訓練、あるいは住む場所…といったことも実際に関わってあるので、各機関が自分の役割を果たしていくことで、一人の人を支援しているのです。

市川さんにお伺いします。今何名の方が、農家さんなどで雇用されていますか？

ちへのサポーターは手厚いように思います。

私の前任の課長のことですが、JAでは相当以前、平成15年から無料職業紹介事業の取組みがありました。元々は農家さんの、例えば誰かが入院した時、誰を雇用したらいいの？といった声や要望から始まった事業です。

人を受け入れてみたものの、うまくいかない事例が出てきました。当時はまだ農福連携という言葉もなく、雇用がつながっていかず、課長には何とかしたいという思いがありました。

平成30年に高知県安芸福祉保健所の公文一也(*)さんという、農福連携では全国的に知られている方がたまたま先輩後輩の間柄だったこともあって、話す機会がありました。

そのとき、「私の前任の課長が、昔ちよつとつまずいて困った事例があったけれど、どうしているか分からなかった。結局、農業で働く人が辞めてしまった。どうも生きづらさを抱え

ちよつたんではないかなあ…」と伝えました。その思いがあったので、この事業が始まった時には絶対農業就労サポーターがいないと無理やと思つて、上司に直談判しにいつてくれて、横山さんの雇用に至つた経緯があると思います。濱田…これは無料職業紹介事業でも、農家さんも本人も何か抱えているものがあるだろうし、定着するためには、双方をつないでいく必要があるということですよ。障害者に限らず、重要な機能ですよ。だから、JAがサポーターを配置し、自分でできないことは周りに頼むということが、とても大切だということです。

(*1) 公文一也氏の取組みについては、以下等をご参照。

公文一也「自殺対策から始まった農福連携ケアシステム…みんなが幸せになる町づくり」『高知県作業療法』V O I . 1

2021年8月 25-29ページ。

厚生労働省「ひきこもりVOICE STATION」ウェブ

サイト
<https://nikkonoh-voice-station.nhw.go.jp/>

それから熊原さんが何か色々、ごちゃまぜ的なことをやっていて、僕が大変ユニークだなと思つたことがもう一つあります。今日のご報告にはなかつたのですが、高齢者のデイサービスセンターにB型事業所の障害者と保育園児がいることなのです。色々と仕掛けたようですよ。どうして始まつたのでしょうか？

熊原…多くの方が私のおしゃべりについてこれなかつたとは思っていません。よく理解してくださいと思つています。

本論に入る前に、先ほどのJA高知県のお話をしてもいいですか。

濱田…どうぞ、どうぞ。

熊原…私は、初めてこの実践報告を聴かせていただいたので、すごいなと思いました。

少し整理します。障害者福祉の制度からみると、就労移行支援と、就労定着支援と、相談支援事業をやっている。そしてもう一つは、「な

2. 社会福祉法人優輝福祉会

―「まるごと福祉」と逆転の発想―

濱田…地域を支える取組みを実践するのが、優輝福祉会の熊原さんです。40年以上前に発足した、「過疎を逆手にとる会(逆手会)」の現会長です。

熊原さんの報告は早口だったから、皆さんちよつと分からなかつたかもしれません。ひとつの話題で15分話してしまう方なのですが…。これまで地域福祉の様々な課題に取り組み、来年度からは新しい法人の理事長となります。

熊原さんの色々な取組みのなかでも、まず農福連携ということで、障害を持つている方が山に入つて木を切つて薪にすることや、あるいはその延長線上で、子どもたちを山に入れて、木育をするお話がありました。これは今日初めてうかがいました。

かぼつ」と紹介された「障害者就業・生活支援センター」の役割も果たしています。関東から北では「就ぼつ」と呼ぶ地域もあります。障害がある方の一般就労をサポートし、生活支援を行う機関です。

それからというと、農業就労サポーターの導入が何処まで広がっているのかわかりませんが、これをもつと全面的にやっていたら、農福連携の成功事例がどんどん増えてくると思いますが、ご存じなら教えてください。

濱田…多分今のところ、ここしかないです。だから、今日登壇していただきました。

熊原…分かりました。横山さんつて、凄いなと思ひましたよ。拍手をしたい。

濱田…拍手！拍手！（会場拍手）

熊原…私のシンポジウムですから、自由に発言した方がいいと思ひまして、こんなことを言つてしまいましたけど。

濱田…どうぞ、どうぞ(笑)。

熊原…「ごちゃまぜ」というのは、石川県で社会福祉法人佛子園を運営する雄谷良成さん(理事長・僧侶)の取り組みです。最近ではNHKの日曜日午前中のTV番組で紹介されたりして、超有名になりました。^(*)2)

私はもつと前から「まるごと福祉」と言っていました。これは決してたくてやったことではありません。以前子育て世代の若い人たちがIターンも含めやって来て、保育料が大変だというので、事業所内保育施設「こどもの家のこ



熊原保氏

こ」でもあると理解していただければよいと思います。答えになっていますでしょうか？

濱田…大丈夫です。ありがとうございます。
熊原さんは先ほど、農地、耕作断念地を引き取ったお話をされましたが、例えば地域で手を引いてしまったレストランや加工施設も、同じようにきれいに再生するのです。

優輝福祉会は規模の大きい法人なので、職員の方達が働きやすいように事業所内保育施設を作りました。その隣にデイサービスセンターを立ち上げ、さらに就労継続支援B型事業所も入っています。

お昼に高齢者のデイサービスセンターに行きますと、子どもたちが遊んでいるんです。しかも高齢者のお手伝いやデイサービスの掃除をしているのが、B型事業所の障害者の方達なのです。だから、必然的に高齢者・障害者・子どもが同じ空間にいる状態が作られるわけですね。

この「このっこ」を開きました。今は制度が変わったので、事業をやめました。

そこに、奥さん孝行でパン屋とレストランの経営をはじめたものの、4年もしたら人が雇えなくなつたと閉店した方がいたので。空き店舗をいただいて、高齢者のデイサービスセンターと障害者の就労継続支援B型事業所をはじめました。「このこのっこ」で活動をしていたら、必然的に高齢者と障害者と子どもたちがごちゃまぜになり、「まるごと福祉」になったのです。

それが無縁社会を克服する一つの材料になるのではないかとということで、『里山資本主義』の第4章で紹介されたところがございます。^(*)3)

けれども本当は、たまたまではないのです。「共生型福祉」つまり子どもも高齢者も障害者もビジネスも含めたものを目指して、したたかにやりました。それが制度でいうと「農村RM

熊原さんはもう一つ面白いこと、高齢者と障害者とでトマトのハウス栽培をされていました。最近ではコロナでやっていないかもしれませんが、どんなことをされていたのでしょうか。

熊原…水耕栽培で、糖度の高いトマトを生産しております。そばで見ていると、高齢者の方が先生の場合もあるし、障害者の方が先生の場合もありますし、どちらが先生か生徒かよく分からないと思います。職員が一番教えてもらっているかもしれません。

農業は障害のある方々にとって大変いい仕事ですね。横山さんと同じだと思のですが、この方にとってできること、得意なことを発見して、生きがいや成功体験を持っていたたく。当れば上手くいくのですね。一人一輝というか、どなたにもいい仕事があるのです。それを発見することが連携の鍵になっていくのではないかと、いつも思っています。

もう一つは逆転の発想です。「困ったは大変だ」ではなく「困ったはありがたい。宝だ」という発想は、私の名物です。困ったことは宝で、クレームはもつとよい宝です。

投資0でトマトハウスを譲ってもらい、その上宣伝をいっぱいしていただいているので、良かったなあと思います。それでもここに職員がおりましたら「えらい目におうとる！」と言われるかもわかりませんが…。全国の皆さん、今の忘れてくださいね。はた迷惑だと言わないでいただきたいと思います。以上です。

濱田：障害者の方が事業所内の農地で就労して賃金を得るのですが、そこにデイサービスセンターの高齢者も一緒に作業してもらいます。

要するに、障害者と高齢者が一緒にサービスを受けるのではなく、作業をするのです。しかも少し収益が出た時は、高齢者の方に謝金という形でお金を渡していたのです。

3. 農事組合法人共働学舎新得農場

―父の理想と「あの有名な女性」の言葉―

濱田：宮嶋さんは先ほど物理の話などをしていたので、理系がご専門と受け止めた方もいらっしゃるかもしれません。

しかし宮嶋さんは「共生」という言葉が使われるようになったごく初期、「ひきこもり」や「発達障害」といった言葉が未だなかった頃から、様々な方達を農業法人で受け入れてきました。

障害福祉サービス事業をやらずに別にNPOを作り、農業法人からNPOに委託する形式なのですが、何で農業をやり、多様な方達を受け入れようと思ったのですか。

宮嶋：共働学舎を始めたのは、僕の親父です。

親父は東京の私立学校の英語の教師をしていました。40歳過ぎから段々目が見えなくなっ

た高齢者のデイサービスで謝金が渡せるようになったのはつい6年ほど前のこと^{(*)4}です。以前は施設内通貨をつくって謝礼にしていました。熊原さんはそれを地域通貨にまで発展させた仕掛け人です。本当にすごいアイデアマンです。

(*)2 社会福祉法人佛子園および雄谷良成氏の実践については、雄谷良成監修・竹本鉄雄編著「ソーシャルイノベーション：社会福祉法人佛子園が「ごちゃませ」で挑む地方創生」ダイヤモン社・2018年9月に詳しい。
なお紹介されたTV番組はNHKテレ「こころの時代」宗教・人生とその言葉が道をひらく」「ごちゃませ」で生きていく」初回放送日は2022年11月6日。
NHKウェブサイト
<https://www.nhk.jp/p/ts/X83KJF6973/episode/te/VN4PL73XGP/>

(*)3 澤谷浩介・NHK広島取材班「里山資本主義：日本経済は「安心の原理」で動く」角川書店、2013年7月。「第4章、無縁社会」の克服：福祉先進国も学ぶ、過疎の町」の知恵」本書204-231ページ）に掲載。

(*)4 厚生労働省は2018（平成30）年7月、全国の自治体に対し事務連絡「若年性認知症の方を中心とした介護サービス事業所における地域での社会参加活動の実施について」を发出了。これを機に、利用者がデイサービスの一環として有償ボランティアに参加し、謝礼を受けられるようになった。
厚生労働省ウェブページ
<https://www.mhlw.go.jp/content/12601000/000340865.pdf>

50歳で学校を辞めるのですが、その時点で非常に理想主義の人でございました^{(*)5}。

目が見えないということは便利ですね。自分が理想主義で、現実は見えてないからです。

そしてそれを現実にしなければいけないのは、息子・娘です。これって、たちが悪いじゃないですか？大変ですよ。（父が子どもたちに理想を語る理由や目的が）何となく分かるから僕は逃げましたね。で、アメリカに逃げた。ただし、流石に逃げっぱなしはできなかつた。

で、その時何をやったかというところ、日本の環境に一番あった牛飼いの技術を学ぶことでした。日本でミルクを搾ってチーズを作ること、難しいからできないとされていた。でも収益性は、チーズみたいな加工品を作って実際に売れば、一番高いわけです。

僕は親父からお小遣いをもらえなくなりましたから、いくらあつたら自分で生活が

できるかという計算は、もう20歳の頃には真剣に考えていました。自分が使うお金を、サッカー部を休まずに、いかにしたら稼げるか。バイトで稼がないと、自分で使える、おせんべいを買うお金がないのです。そこで自動車を売ったり、リクルートをしたりしたわけです。その半分社会的な経験、これがよかったですね。

共働学舎は、僕が大学にあたる学校を日本で卒業する年に始まりました。親父は明らかに、僕が卒業したらすぐに手伝ってくれると想定しているわけです。長男としては面白くないです



宮嶋望氏

もこの会場にいるのですが。彼女は共働学舎が始まった時からのメンバーですから、逃げられなかったという、ちょっと下世話な話もします。がんにがらめのなかで（のちに新得農場となる土地に）行ってみたら、ものすごい傾斜のきつい山でした。その立地と、手作りだからこそ美味しかったことが、ナチュラルチーズの日本一と、山のチーズの世界一につながったのです。チーズを手作りにせざるを得なかったのは、動作がゆっくりとした障害者と一緒に作業をするためにはどうしたらよいかを考えたからです。機械を使えば何十倍も収量がありますが、彼らの仕事を機械がすることになります。能力を活かすために、必然的に手作りになりました。チーズの生産量は非常に少ないけれども、手作りだとかっこよく言いましたが、実際に美味しい理由を物理的に説明せい、って言われたら、得意になって…。でも今日は止めておきます。

よね。

だからといって、「そんなことやつてられるか!?」って、切り捨てることもできない。

そこで何を考えたか。酪農を始めるのであれば、ちゃんと勉強した方がいい。勉強するのであれば、お金がかかるから働いた方がいい、ということ牛飼いのところに行きました。僕は親父から逃げてアメリカのウイスコンシン州に行ったわけです。

それから働きながら、ウイスコンシン大学に編入し、卒業してBS^(*)6)がもらえました。

このことは、非常にラッキーだったと同時に、大手企業が3社ぐらい誘いに来ました。日本に食料を売る会社が多かったですから、誘いに乗りませんでした。正義感といえはそうなのですが、お金はなかったですね。帰国して羽田についた時には一ドルもないという状況でした。

救われたのは、僕の奥さんの存在です。今日

分かったでしょ？僕のこと。

濱田…すばらしいお話です。はい。

宮嶋…つまり人の手でゆっくり作ること。そのためには、障害を持っていようが健康であろうが関係ない。生きていればいいのです。作物が生きているスピードと同じようにゆっくりできれば凄くありがたいと思います。

濱田…宮嶋さんのところは、奥様と法人のスタッフで、元受刑者も含めありとあらゆる方を受け入れてきました。今みたいに、色々整備されているわけではない頃からやってきたのです。これは並大抵のことではなかったのですね。

面白いのは、ある時宮嶋さんが自分のところで成功したので、世界に飛び出そうとしたら、あの有名な女性に一言言われたんですよ？

宮嶋…僕、たまたま、マザー・テレサと直に話したことがあったんです。^(*)7)

僕、英語がしゃべれるから、直に話している

のです。親父も一緒に行きました。英語教師だから自分で話すと思ったら、涙をるいと流して一言もしゃべらないですよ。

僕が一人でしゃべっていたら、マザー・テレサは、最初は凄く柔和な顔で聞いていました。ところが僕が、学校に行けない子や、食べものがない子のために何かしたいと言ったら、急に顔つきが変わったんですよ。その時は、ものすごくおっかない顔だと思いました。

マザーは「あなたは何を言っているの？今の日本では、食料や教育より、精神的に不安定になってしまった子どもたちに気持ちよく生活できる場所を作ることが必要なですよ」と。そして「精神的な悩みを持っている人の割合が一番多いのは日本ですよ」とも言われたのです。

マザーに言われたら、逃げられないじゃないですか？内心「ああ、やべえ…」と思ったのと同時に、「これから自分の牧場を活かすために、

の多様な主体としてお呼びしました。

J A 高知県安芸地区の取組みは、多様な組織や機関がつながり、一人の方を支援する。一人を孤立させないということを地域全体でやっています。これは厚生労働省という重層の支援であり、共生社会を作ることにつながります。

熊原さんのところは、ただ単に共生社会を作るだけではなく、多様な人々を結び付けて地域の課題解決に持っていくことに、何十年前前から取り組んでこられました。さらに優輝福祉会の経営に携わるようになった頃のお話を聞いても面白いので、皆さん後で名刺交換をして、飲み会に誘ってください。

宮嶋さんは地域だけではなく、日本の今後をどうするべきかを考えていることが、とてもよくお分かりになったかと思えます。

もう一方の柱としては、これから私達が、そ

どんなことをしたらよいのだろうか？」と考えるようになったということです。

濱田：宮嶋さんの発想は、日本の食料問題や、子どもたちの育ちをどうしたらよいかを考えることにはじまっています。それらを40年以上一貫して、十勝の地に根付いて取り組んでこられたのです。ありがとうございます。

(*5) 宮嶋氏の父・宮嶋眞一郎氏は、東京の私学・自由学園男子部中等科・高等科)での教職を経て、1974年に長野県小谷村にて共働学舎を創設した。共働学舎設立時の構想については、特定非営利活動法人共働学舎ウェブサイト
<https://kyodogakusya.or.jp/plans> を参照。

(*6) Bachelor of Scienceの略。理系分野を専攻して取得する学士号のこと。

(*7) マザー・テレサ (Mother Teresa: 1910-97) カトリックの修道女。マケドニア (現・北マケドニア共和国) 生まれ。18歳で修道女となり、1950年にインドにて「神の愛の宣教師会」を設立。スラム街を拠点に病氣や貧困に苦しむ人々の保護・救済のために献身的な活動を行い、1979年にノーベル平和賞を受賞した。

4. まとめ

濱田：今日のセミナーでは、お三方を農福連携

それぞれ役割を持ち、どのような方向に進んでいくのか。一人ひとりの人を大切にし、病んでいる人達を再び社会復帰させていくことに、一つの法人だけでなく地域で取り組む。それは国を作ることにもつながります。そういったことを是非皆さんにお伝えしたくて、お呼びしました。

今日は時間がなく、参加者の皆さんからの質問に答えられず、討論もしたかったのですが、お許しをいただければと思います。

お三方にはこれからもぜひ元気に頑張つて、楽しみながら地域の課題を解決していただければと思います。

ありがとうございます。